

「アッサラム アライクム」～パレスチナ・ガザのために祈りましょう

2023年9月16日土曜日、わたしは18日間の聖地巡礼研修を終え、イスラエルから帰国をしました。ベン・グリオン国際空港でスーツケースを預ける時に、鍵をかけると壊されるから鍵をかけないようにとアドバイスをされ荷物を預けましたが、帰国後成田で、エルサレムの滞在中に購入したパレスチナ関連の書籍が全部没収されていることに、イスラエルという国の恐ろしさを感じました。

そしてその3週間後の10月7日に、ハマスによるイスラエル奇襲が起こり、それに続くイスラエル軍によるガザ地区への壊滅的な軍事報復（ガザ戦争）が始まりました。2025年10月の名ばかりの停戦合意後も、散発的な攻撃によって犠牲者が増え続け、この3年間の戦闘でガザ地区の死者は7万4,000人を超えました。

確認しておきたいと思いますが、ガザ戦争は、「イスラエルの力によるパレスチナ抑圧の限界」と「ハマスとイスラエル間での憎悪の連鎖」が最悪の形で噴出した結果です。

日本のキリスト教界の一部には、現在のイスラエルの建国に神さまの導きを見出すという信じられない言説がありますが、数千年前の旧約聖書を根拠にした国家建設が、21世紀になってもなお、終わりのない流血の惨劇を生み出し続けるという歴史的・構造的無理難題をガザ戦争は浮き彫りにしているのです。

旧約聖書創世記において、神はアブラハムとその子孫に「カナン土地（現在のパレスチナ）」を与えると約束をしました。19世紀末に始まったシオニズム運動（ユダヤ人の祖国再建運動）は、この数千年前の「神の約束」を精神的・歴史的拠り所としています。

しかし、現代の国際政治において数千年前の宗教聖典の記述を、現代の領有権の根拠とすることは、法的な正当性を持ち得ません。なぜなら、その地にはユダヤ人が離散（ディアスポラ）した後の約2000年間、アラブ系パレスチナ人が何世代にもわたり住み続け、独自の社会と文化を築いていたからです。宗教的信仰を国際法や先住民の居住権よりも優先して国家を強行建国した点に、まず根本的な無謀さが存在します。

1948年のイスラエル建国は、パレスチナ人にとっては住処を追われる大悲劇「ナクバ（大災厄）」となりました。イスラエルは神領の回復という大義名分のもと、国際法（国連決議など）を無視して入植地（ユダヤ人居住区）を拡大し続け、パレスチナ人の土地を実質的に侵食・分断していきました。

特にガザ地区は、イスラエルによる長年の軍事封鎖により「天井のない監獄」と呼ばれ、移動の自由や経済、人道的物資の供給が極めて厳しく制限されてきました。

「神から与えられた土地の回復」という排他的なナショナリズムは、地続きに生きる他者の生存権を奪うことでしか成り立たないという破綻を内包していたのです。

宗教的・歴史的正当性を盾に、パレスチナ人の存在や平等の権利を無視、あるいは封じ込め続けられれば、安定した国家経営ができるという見通しは、極めて無謀なイスラエルの慢心でした。神さまのみ心がどこにあるのか、わたしたちは祈りながら見誤ることなく、パレスチナの平和の実現を、世界の平和のために祈り続けて参りましょう。

司祭 アンブロジーア後藤香織